

水環境・生物指標(2) (3-E-10-4~3-E-12-1)

主に水環境の質を表現する生物指標に関連する6題の講演が行われた。

(3-E-10-4)はトビケラのPCB蓄積を調べることで、棲息水系のPCB汚染が、環境試料を分析するより高感度で検知できるという報告であり、バイオ指標の意義の一つを明確に示すものであった。

(3-E-11-1)と(3-E-11-3)はDNAレベルで生物を解析し、水環境の特性を表そうとする研究であったが、前者では特にトビケラという昆虫の遺伝子の多様性を取り扱っており、本分野では新規のこころみといえる。現状ではこれらデータが何を表現していくかの解釈が難しく、今後の地道な研究の継続が期待される。

(3-E-11-2)と(3-E-12-1)は各々河川の魚類あるいは底生生物の棲息情報を、構造を含めた河川環境と関連付けるものであったが、前者が多様な魚類の棲息を可能とする河川の姿を探ることが目的であるのに対し、後者は底生生物の多様性をものさしに河川環境を評価しようとしており視点が異なっていた。この手の研究は、紙の上のデータが現状を正しく表現できていることに依存しており、その精査が重要であると考えられる。

(3-E-11-4)は生物とは少し離れ、底質粒子の様々な特性を観ることで、水環境の質が包括的に評価し得ることを示唆したものであった。

本セッションの話題は多様で、水環境中の生物等をモニタリングする目的・意義が極めて多岐に渡ることを改めて認識させるものであった。質疑では、生物多様性が何を意味するのか、どうあるべきなのか、という問いかけがあったのが印象的であり、今後の生物指標セッションの大きな話題の一つになることを予感させた。

(大阪大学大学院・工池道彦)